

Super-string Theory シリーズについて (p.2)

宇宙をイメージするのではなく、宇宙論という思考から触発されたイメージを展開する。

わたしには、生きていく間に次の問題をなんとか知ることができないかという根強い思いがある。

それは、人間とは何か、存在とは何か、宇宙はどうなっているのか、という三つのことである。

そして、これらのことを主要なテーマにしてこのシリーズが生まれた。

1) 「人間とは何か」という問題

人間存在においても包含 - 被包含、つまり詳細化されていく部分構造の重なりが複層的な入れ子となっている。

その詳細化された部分は、単に全体の一部ではなく、独自性を持っている。

そのような詳細化された部分が発する叫びの集合によって、人間は人間を人間たらしめているに違いないのだ。

このように考えると、おのずから存在の基点という問題に向かわざるをえない。

この基点、モナドの底から累積している叫びこそ、解放衝動と名づけなければならない。

この解放衝動は、あらゆる全体化に抗い、それぞれの存在の自由を求めている。細胞も、血や肉も、手や足、内臓、神経、脳みそから髪の毛一本さえも、それぞれの意志において。

このような問題を原初的なテーマに据える場合、それは必然的にマチエールの造形と関連していく。キャンバスにおける肉体的行為とその体験として。

肉体の深奥から立ち上がってくる衝動が、ニードルやナイフやサンドペーパーを選択するのであり、モナドの戦慄が画面の多層化を要求するのであり、マチエールの実在感がそれぞれの存在の証となるのである。

2) 「存在とはどういうことか」という問題

構造としての肉体の詳細化は、その究極において量子論へ到達する。なぜなら、量子論は物質の極小を扱う学問であり、物質の存在について考えること抜きには人間についての探求は不可能だからである。

量子論は量子の重なりと不確定性原理を軸にした理論であるが、マクロでは一つの見え方しかない物質が、ミクロにおいては確率論的にしか見えない(存在しない)というものである。

マクロとかミクロということさえ、見る側のポジションによって定義されるスケールやサイズなどの相対的なものであるため、人間存在はマクロであるとして済ますこともできない。あらゆる存在はミクロの物質による構造体であるからだ。

こうした極小の問題は、さまざまの思考イメージを惹起し、抽象的な表現ばかりではなく、実在としての思考を生み出す原因となるに違いない。

3) 「宇宙はどうなっているのか」という問題

量子論と重力論(相対性理論)は量子重力論という学問によって、宇宙という極大の物質を宇宙の原初、つまり極小のビッグバンを扱うことで統合しようとしている。

その最新の理論である「超ひも理論」によると、物質は極小のひもエネルギーの振動で作られており、このひもはさらに物質の中に多次元を閉じ込めているともされる。

極大の宇宙がそもそも極小のビッグバンから始まっており、サイズやスケールの問題が相対的だとすると、いまだ宇宙は極小のビッグバンの渦中にあるとも考えられる。

つまり、宇宙がビッグバンという物質の内部にあるとすると、宇宙もまた極大のひもエネルギーに巻きつかれているという逆数の相関があるのかもしれない。

2次元で多次元を表現するのは絵画の不可能性といえるのだろうが、このシリーズでは思考イメージの可能性によって平面を造形し、構成しようとしている。

「 10^{-44} sec. 重力の発生」(p.3)

2006.11, oil, canvas, F120 x 4(521.2x194.0cm)

2006.10-11 の2カ月間、横浜市 BankArt studio NYK での公開制作作品

この作品は、横浜市・BankART Studio NYK で2カ月間(2006.10.1 - 11.30)にわたって公開制作したものである。

タイトルの「 10^{-44} sec.」とは時間の最小サイズ(プランク時間)で、ビッグバンから 10^{-44} 秒後に宇宙にある4つの力(強い力、弱い力、電磁気力、重力)のうち、まず重力が発生したというものである。重力はミクロではもっとも弱い力であるが、マクロではあらゆるものについて無限の距離に力を及ぼすとされる。

F120号4枚組の大作は、じつに 10^{-44} 秒という、瞬間というにはあまりにも小さな、恐るべきサイズをイメージしている。

作品の全体を横に貫いて敷設されたケーブルの痕跡、その盛り上がった絵具のマチエールはひもエネルギーを表し、締めつけられた宇宙の原初がその最初期に重力を発生させ、宇宙の基本的な力を誕生させるという思考イメージで作られている。

力はそれぞれ量子的な存在であり、重力はグラビトン(重力子)という粒子的なイメージを持つ。ビッグバンの周囲には宇宙の時間の範囲を示す楕円のユニバースサークルがあり、マスクングによってできたキャンバスの下地の不定形のいくつかのかたまりは多次元のかたまりのイメージでもある。

またそれらは、絵具の層の重なりを剥き出しにし、平面の多層化を強調している。

キャンバスという布、木枠の露出、包囲するものさされるものあいまいな関係、裏側と表側、回り込むもの、折り込まれるもの、これらは現実との対峙をも含め、曲率を持った時空間が多層化しているという含意でもある。

この作品の中で、作家は作品を創造する行為のうちに実在している。それは、作品との物理的な距離のある関係でいうのではなく、ニードルで刻まれた無数の線のひとつひとつ、切り刻まれることで変質したごつごつした無数の粒状の絵具のかたまりに内在しているのである。

つまり、これらのマチエールは存在の基点のそれぞれから大量に発せられた戦慄する狂乱的な泡でもある。

そして、これらの行為のすべてが 10^{-44} 秒という恐るべき極小の時間に、静かに呑み込まれていくのである。

「Super-string Theory」(p.4)

2005.7, oil, canvas, F100x5(651.5x162cm)

それぞれの存在、あらゆる存在の解放衝動と超ひも理論の彼方につく宇宙論的自由とは何かを求めて

第7回展、第8回展で発表した「Super-stringもしくは立ち上がる解放衝動」「White Image」小シリーズで、スクラッチングとひもの埋設、研ぎ出しによる画面造形の方法に、ある方向性を見出すことができた。この手法による大作を企画したのはこの直後である。

それまでの「解放衝動」という思考は、これまでの人間 肉体 細胞 モナドへと向かう存在の下層への探求から生まれたものだが、さ

らに極小の量子と極大のユニバースがひも理論によって結合するという刺激的な現代物理学に大きく触発されて、「Super-stringシリーズ」を大テーマにすることにした。これは、抑圧と自由の問題である解放衝動とも本質的に連続していると考えられるからだ。

この5枚組の作品においては、極小とは光とひもの波打ちであり、振動であり、極大のユニバースとは空間と時間の大きな変化である。

振動するひも、大きなうねりを持つ巨大なひもを麻、棕櫚縄、綿糸などを下地に埋め込み、大量の絵具を重ねていき、ニードルやナイフでスクラッチングし、サンドペーパーで何度も研ぎだしていく。

ここには、モナド 細胞 肉体の律動という、いわば「解放衝動」の肉体的行為がある。そして、そのことがマチエールの造形に直接結合していくのである。

string (ひも) の全振動は、この解放衝動とキャンパス上で出遭っているのだ。

宇宙はこの存在の律動、肉体の律動とも深く結びついているのだ、という思いがするのである。

「からだを張った」作業において意味を持つものとして、次の点があげられる。

- ・純粋な肉体的行為の繰り返し。
- ・創造行為における原初性の発動。
- ・存在に包含される「それぞれの存在」の解放衝動。

[2005.5.26 ~ 7.20にかけてF100号5枚、横6.5メートルの大作を制作。制作過程の写真記録をWEBで公開している。]

解放衝動の発生 L, C, R (p.5)

2005.12, oil, canvas, F100(130.3x162.0cm)

解放衝動の探求 I, II (p.6)

2006.4, oil, canvas, F100(130.3x162.0cm)

10^{-36} 秒 (L, R) (p.7)

2006.7, oil, canvas, F100(130.3x162.0cm)

超ひも理論の思考イメージ I, II (p.8)

2006.10, oil, canvas, F100(130.3x162.0cm)

Super-string もしくは立ち上がる解放衝動 (p.9)

2005.2, oil, canvas, F100(130.3x162.0cm)

遠隔力 (p.9)

2006.8, oil, concrete panel, 90.0x180.0cm)

D-brane (p.10)

2007.7, oil, canvas, F100(162.0x130.3cm)

Dirichlet membrane.

ディリクレ境界条件 (固定端の境界条件) を次元の膜として、そこを開いた超ひもが動き回るといえるものである。これは超ひもとブラックホールをつなぐ理論といわれている。

作品の中では、さまざまな超ひものイメージがこの量子の膜を宇宙の膜面として運動している。

光の波動と螺旋のイメージ、その背景に滑るように存在する超ひも、または重ねられた膜そのもの。重ねられた膜をつなぐひもの断面のような色のある円記号。

幾何学の残渣でもあるような質感のある画面を背景に、宇宙面や反-次元、量子のスピンなどの極小化された物質が散らばっている。

そして、D-ブレンそのものの向こうには、かすかにピンク色を帯びた白い虚空間が画面を裁断するがごとくに広がっている。

「転移」1, 2 (p.10)

2007.3, oil, canvas, P20(53.0x72.7cm)

相転移 phase transition とは、ある物質の相が別の姿の相に転ずるということで、超ひも理論の数学ではひもエネルギーで締めつけられた次元空間が別の形態の空間に移行するというものである。

これは、いくつかの超ひもの幾何学や数学が主要なひとつの理論の別の現れであるとするM理論や、ブラックホールからビッグバンが生まれるなどのアイデアに通じるようでもある。

また、見方を変えるということの対象が変化するということだけではなく、物質そのものがおのずから別の物質状態あるいは宇宙相に変化するということをも示唆している。

次元はそもそも理想化されたスケールであるが、「転移1」は、曲率をもった次元が物質の中に突如として生まれた空間が裂けて相転移するときに飛び出したイメージである。4つの力、あるいは4つの次元。フロップ転移 (ひも理論の幾何学であるカラビ-ヤウ空間で、空間の相が入れ替わることで空間の破滅を修復する転移) を暗示した、千切れそうなひもエネルギー。

また、「転移2」では、同じ相転移でもまったく形の異なるねじれた管、環のイメージ。視点を同時に合わせることはできないが、同じ物質が同時に異なる位置に存在している。

作品のそれぞれには、裂かれた形のひもが黄色の絵具の底に埋め込まれている。

宇宙面 1, 2 (p.11)

2007.5, oil, canvas, P20(53.0x72.7cm)

宇宙面(小品)1 ~ 5 (p.11)

2007.5-6, oil, canvas, S0(18.0x18.0cm)

宇宙面とは、世界面をより抽象化してイメージした記号であるが、ここには時空の湾曲、ブラックホールとビッグバンの発生、物質と反物質などが表現されている。これは、宇宙の断面図でもある。

さらに、この記号を平面的な視点から俯瞰したものがこの作品の主要テーマである。

また、背後の幾何学的な影や自由曲線、次元の裏側を示す露出した基層、これらのある種の情感を伴うことでふわりとした浮遊感をもたせて構成してみた。

黒白に分割された複数の小円は、量子のスピンを記号化したものである。

「Uncertainty Principle」1~4 (p.12)

2007.3, oil, canvas, M6(41.0x24.2cm)

M6号サイズの4点の作品では、珍しくひもは使っていない。

タイトルは量子論における「不確定性原理」である。

カーボンブラックの粉を樹脂で練り込んで、キャンパスに何度も重ね塗りし、研ぎ出し、絨のような艶を出す。下地にはアクリル系の絵具の色点を散らしてある。

S字形に見える図形は相転移をイメージした物質であり、これ自体ひもでもある。銀色をベースに、図形の増加とともに金色で侵蝕の変化をつけてバリエーションとした。重ね合わせと不確定性。

また、マスキングをはずした下地はぼんやりとしたスリット(切れ目)が光の二重スリット実験を想起させ、量子の世界を印象づける。

生命系 1~5 (p.12)

2007.6, oil, canvas, F6(41.0x31.8cm)

「CMB(Cosmic Microwave Background)」1~5 (p.13)

2007.3, oil, canvas, P3(27.3x22.0cm)

宇宙マイクロ波背景放射をテーマにした5点。

ビッグバンから40万年後に宇宙はプラズマ状態を脱し、「宇宙の晴れ上がり」という時期を迎える。この透明で冷えた空間に放射されたマイクロ波(光子)は宇宙全域に及び、この検出がビッグバンと膨張説の証拠とされる。

ひもの曲線のパターンと研ぎ出しによる下層の絵具の斑模様、宇宙膨張によって赤方偏移を受けた光子のイメージでもある。

マスキングで切り抜かれた部分は、隠された次元、露出したこちら側、あちら側。

「反-次元のかたまり」1~5 (p.13)

2007.3, oil, canvas, F3(22.0x27.3cm)

ひもエネルギーが単純化された配置で、物質と空間を締めつけている。その傍らで次元のかたまりらしきものが物質の部分を見えさせている。

また、真空の中に隠されている白いのっぴりとした反-次元のイメージは次元のペアである。

[近作] 2007.7. oil, canvas (p.14)

広汎でつか弱き graviton

インフレーション

包含関係への打撃

untitled

とあるイリュージョン C

Thus

untitled

作品の特徴 (p.15)

麻ひも、棕櫚縄、綿糸などをキャンパスに埋め込み、多量の油絵具で重ね塗りしながら、ニードルでのスクラッチング、サンドペーパーなどでの研ぎ出しなどを繰り返し、実在感のあるマチエールでの表現をベースに、コンセプチュアルなイメージを展開する。また、マスキ

ング部分の露出、キャンパスの折り込みによる木枠の露出なども。

制作コンセプト (p.15)

この2年余りのテーマは、量子論と相対性理論をつなぐ

「Super-string Theory(超ひも理論)」の思考イメージならびに抑圧と自由の問題。「人間とは何か、存在とはどういうことか、宇宙はどのようなものか」を思索することにより、その思考イメージをキャンパスに表現している。

肉体の行為としての作品制作自体に重きを置き、それがマチエールの質感に現れることで、「実在」の問題の表現ともなるはずである。

作品創造の源泉とは行為の原初性(プリミティビティ)にあると考えているが、それはとりもなおさず、存在の基点から重なり続ける内部世界の解放衝動を意味している。

また、WEB、展示、配布用パンフなどで同時に発表している宇宙論、量子論の考察、詩作品などの制作も、キャンパスを作り出す「場」に収斂されてきている。

ひもを多用するのは超ひも理論の即物的イメージということもあるが、スクラッチング、研ぎ出し、キャンパスの露出や折り込みなどは、平面の多層的な重なりという問題、現実を包み込むあるいは裏側に回り込むということはどういうことか、さらにリーマン幾何学の曲率空間、次元の問題などとの関連がある。

超ひも理論によって物質と宇宙の問題が近い将来に明らかになる可能性があるということは、大きな価値観、世界観の転回が近づいてきているということでもあり、アーティストとしては強く触発されるものがある。

なお作品は個展ごとに制作計画を立て、「超ひも」シリーズの個別テーマとして、大作、小品の作品群を制作し、精力的に発表している。(この2年で制作したシリーズ作品は100号以上の20枚余を入れて、100点以上)

画歴 (p.15)

紙田 彰(かみた あきら) 1951年、洛陽にて出生

2000.12. 25 大動脈解離を発症

2001. 5 突然、油絵を描き出す.....

2001.10 公募展への出品を始める

2003. 6 個展活動を始める

個展

2003から2007年まで、銀座、京橋にて19回

19回展: 2007.05.07-12 紙田 彰「宇宙論の造形」, [京橋・小野ギャラリー]

Super-string seriesの展覧会は2005.4の第7回から13回になる。

その他

横浜市BankArt NYK 公開制作展 2006.10.1~11.30

"Super-string"シリーズ「 10^{-44} sec. 重力の発生」

公募展等 入選多数

紙田彰(かみた あきら) Akira Kamita

〒1340087 東京都江戸川区清新町1-1-22-105

Tel. +81-3-3686-5915

Fax. +81-3-3686-5926

E-mail akami ta@a-kami ta.jp

WWW. a-kami ta.jp